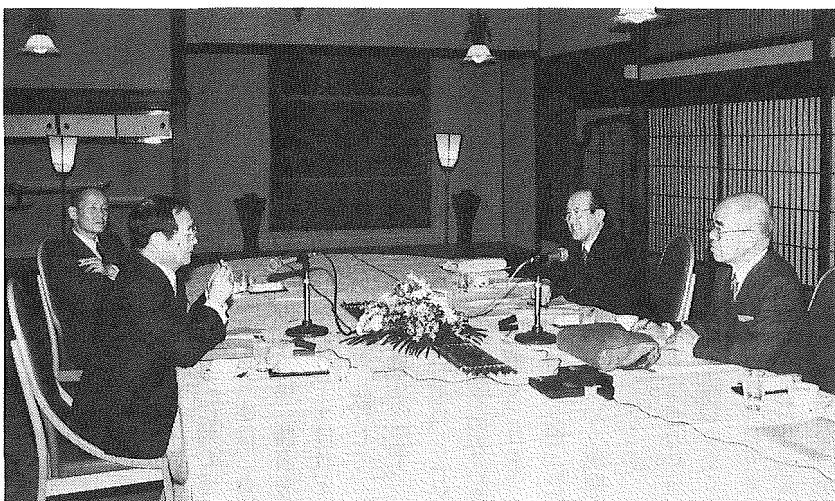


日本の文化を語る

第2回

日本文化と和歌



岡野弘彦（おかの ひろひこ）

大正十三年七月七日生まれ。国学院大学文学科卒業。現在、国学院大学教授。専攻、上代文学、和歌。著書に『神がみの座』など、他に歌集多数。

濱口博章（はまぐち ひろあき）

大正十四年二月十日生まれ。京都大学文学部卒業。甲南大学名誉教授、大阪薫英女子短期大学教授。専攻、中古・中世の物語・和歌文学。著書、『中世和歌の研究―資料と考証―』など。

加藤隆久（かとう たかひさ）

昭和九年八月二十八日生まれ。国学院大学大学院修了。現在、生田神社宮司、神戸女子大学教授、文学博士。専攻、神道史、国学、近世和歌。主な著書、『神社の史的研究』、『神道津和野教学の研究』など。

司会(加藤) 時候が非常によくなくて、日本人の最も好む桜の花がいよいよ咲き始めまして、何となく歌心が湧いてくるというような、今日この頃なんぞございますけれども、本日「日本文化と和歌」というテーマで、岡野、濱口両先生にお話を伺いたいと思います。

岡野先生は大学で日本文学を講義していらつしやるとともに、歌人としても著名でいらつしやいますし、数々の素晴らしい歌をお詠みになって、宮中歌会始の選者をお勤めでいらつしやいます。また、濱口先生は、中古、中世の物語、特に和歌文学、とりわけ中世和歌の研究家として著名でいらつしやいます。

そこで一つお得意の分野で、お気軽に日本文化と和歌について語っていただきたいと思えます。芳賀矢一先生の『文学史十講』の中で、「日本の文学はすべて和歌が骨子となっておる」と、こういうふう述べておられますけれど、歴史的に見ましても、長い長い間日本人はこの非常に短い形の叙情詩の中に、その時代、時代の人々によって、思いの丈をその中に歌い込んでいるわけなのであります。この伝統から申しますと、和歌というものは日本文化の重要な要素の一つであろうと、思います。

私の友人で先日外国に長く住んでいたある学者が、東西の発想の違いとしまして、こんなことを言っていました

ね。つまり、思考の上からは日本は非常に調和的、情緒的であるのに対して、欧米は対決的、論理的であること。また表現の上からは、日本は、曖昧、間接的、含蓄深いといったものに対して、欧米は、明確、直接的、ストレートであること。行動の上からは、日本は、組織、グループ中心であるのに対して、欧米は、個人中心である。闘争についても、日本は、負けた者、敗者に同情的であるのに対して、欧米では、勝者を好むといったようなことを指摘しておいたわけですが、これも、どうも和歌についても欧米の文学なんかと比較して、こうしたようなことが言えるのではないかと思うのです。

つい最近、これは非常に俗なことになるかもしれませんが、『題名のない音楽会』という、テレビ番組を見ました。その中で、日本、ドイツ、アメリカ、フランスのそれぞれ国の詩を、違った国のメロディーに合わせてやるとどうなるのかという実験を行っていました。謡曲のお囃子とか、シャンソンとか、ジャズとか、あるいはドイツ歌曲といいますが、そういうメロディーをベースにして、異国の言葉で詩を読むと全く合わない。そういうことがわかったわけですが、やはりその国々の言葉とか、詩とか、歌には、その国独自のリズムとか、メロディーとかいうようなものがあるんじゃないかと、こういうふう思うわけです。従っ

て和歌のいわゆる「五・七・五・七・七」というリズムも日本独特のものではないかと思うのですけど。

そこで両先生に、ご紹介の意味も兼ねて、和歌との出会いといいますが、先生がはじめて和歌との出会いをもったのはいつ頃かといったことから、一つお話を願ったと存じますが、岡野先生どうでしょう。

和歌との出会い

岡野 それではご指名で、私の方から先に歌との所縁を話させていただきますが、私は中学が伊勢の神宮皇学館の普通科（中学部）を出ております。あそこでは三年生になった頃から作歌の時間がありました。やがてそこを卒業して、國學院大學の予科へ入ってみましたら、國學院大學の予科にも作歌の時間というのがありまして、そこでまた歌を作らせられました。



その伊勢の皇学館では、一年に二度歌を非常に晴れの形で発表してもらう時がありまして、一度は本居宣長さんの山室山のお墓に、命日に桜の苗木を持って行きまして、そして墓参をしてあそこに桜を

植えるんです。教えてくださったのは、金剛幸之介^{こうのすけ}という伊勢の佐々木信綱門下の先生でしたけれども、歌を作らせて、クラスで一人宣長さんの墓の前で、朗詠してもらえ

るわけです。それからもう一つ秋に、名月の夜、観月会というのがありまして、これはやはり選んだ歌を冷泉流の朗詠で披露してくださるわけです。子供ですからそういう晴れの場で自分の詠んだ歌が選ばれて、皆さんの前で朗詠せられるというのは、非常に励みでして、その頃初めて歌に対する目が開かれたわけです。ただ、今から考えますとその先生少し、近代の短歌の中では草分けの頃の歌風だったと思いますね、ですから落合直文の、

乙女らが泳ぎしあとの遠浅に

浮き輪のごとき月浮かびきぬ

「ええじゃろう、乙女ら泳いだあとと浮き輪のごとき月浮かびきぬ、ええじゃろう」というふうな言い方で、まずご自分が感動なすつてしまふ。しかし今から考えれば僕はそれで良かったんだと思うのです。先生があんなに「ええじゃろう、ええじゃろう」と言われるから、あの歌いいんだろうなと思って……。

しかし今から考えますと、落合直文なんかの、鉄幹よりも子規よりも先に、いわば新派短歌の第一歩を開いてくれ

た人の、割合に若々しい感情を詠んだ歌を教えてくだすったというのは、われわれに最初の歌の興味を引き出すのは、大変ありがたかったと思うのです。その辺からだんだんと歌に引き寄せられて行つたわけです。國學院へ入りまして、釈迦空、折口信夫先生の教えを受けて、それから本気になって歌を作るようになりましたが、最初はそんなことです。

司会 岡野先生がご本の中に、五歳ころに何か若水を汲みに行かれてお父様から教えられたとなえごとを、暗誦されたのが短歌を暗誦されたはじまりというような、エピソードが出てましたですね。

岡野 今ではそういう面が非常にわれわれおろそかになつていたり、あるいはわれわれの考える日常の日本人の現代の文化というふうなことから、疎外されてしまつていゝんですけれども、歌というのは日本人にとって、まず文学以前の生活の中のいわば祈りの言葉であつたわけですね。

天皇国見の場での歌とか、あるいは春の若菜摘みの場で求婚なさる雄略天皇の歌なんかというものは、一つの典型ですね。生活の中での力あるマジカルな、呪的な靈力の籠っている言葉の典型として、ああいう古典の最初の辺りに置かれてゐるわけなんですけれども。そういう歌の持つてゐるマジカルな力というのが、まだ現代でも残っている部

分がありますね。そういうのを迷信とかつていうふうな言葉で、単純に疎外してしまつてゐるんですけれど、神主の家というのは割合にそういうのが残つてゐるところがありまして、私なんか五つになつて初めて、父に代わつて若水を汲みに行かせられたんです。その時に父から唱える言葉を教えられるわけです。それが、

今朝汲む水は、福汲む水汲む宝汲む、

命永くの水を汲むかな

この言葉を上流に向かつて三遍唱える。雲出川くもすずの一番上流のところですよ。言い間違えてはいかんというから、一生懸命覚えましてね。そのほか神主の家にはどうしても短歌と縁の深い生活がありますから、それは子供心に染み付いてゐたと思いますね。



司会 私の父親の年譜みたいなものを見ましたら、やはり四、五歳の頃から、母親から『小倉百人一首』を、口ずさみつつ教えられて、それを暗誦したという事が書かれていますね。また祖父が、祖父の作になるところの「手習教本」というのがありまして、『四季近郷集』きせききんきょうしゅうというのがある、それを学んでそれを暗誦

したとありますが。どうも昔の人は『百人一首』とか、あ
るいは唱えごととか、そういうものを口伝えに、祖父母と
か父母とかからなんとなく教えられて、歌心といいますが
日本的リズムというのか、そういうものを覚えたようです
ね。

私なんか小学校の頃、疎開先の小学校では、食事の前に
必ず唱えごとをしないと食べさせて貰えない。それは今で
も覚えているのは、「箸取らば天地御世の御恵み、祖先や父
母の恩を味わいー頂きます」、それ考えてみたらちゃんと歌
になってるんですね。

また朝礼の時には校長先生が、戦時中でしたからうやう
やしく「明治天皇御製」と言って、

朝みどり澄み渡りたる大空の広きを己が心とがな
それをみんなわれわれあんまり意味もわからずに、しかし
何となく晴々しい気持で朝礼の時間に唱えておったという
ようなことがあって、今でも犬養孝さんなんかは万葉旅行
へ行かれても、必ず節を付けて歌われるようですけど、何
かやっぱりああいうリズムというのは、日本的なものなん
ですかね。濱口先生はいかがですか、先生は和歌の研究家
でいらっしやるわけですけど、そういう和歌との出会い
といいますが、先生は沢瀉久孝先生のお弟子さんとうかが
っていますか。

濱口 そういうふうには水を向けられますと、司会の加藤
宮司さんのご存じない面を、私話さなくてはならんことにな
ってくるんで。

司会 はい、それはぜひお願いします。

濱口 私は五島茂・美代子先生の「立春」に属してたん
です、ご存じないでしょう。

司会 いや、それは全然知りませんでした。



濱口 今初めて告白するよ
うなことでして、(笑) 中学校
の頃。それは一つは、いま岡
野先生も中学校の先生の感化
ということをおっしゃってら
れましたけれど、私中学校は
甲子園にあった甲陽中学校で
すが、この学校は一年生からずつとクラス変えがないんで
す、クラス担任も変わらないんです。ただクラス担任は四
年の時に大阪府立北野中学校へ移られたんですけれども、
藤田福夫先生と言って、いま歌誌「日本海」を主催なさっ
てます。前は名古屋の椋山女学院大学にいらっしやいまし
て、その前は金沢大学でしたけど。その藤田先生が四年間
クラス担任でした。ですから私が国文というようなことにな
ったのも、やっぱり藤田先生とか、その先輩になられる

亡くなられました北村善一先生という方とかが、京都帝大の国文の卒業でして。何となくそういうふうな影響があったかと思います。

しかし藤田先生は「帚木」であり、「水蘗」に所属しておられまして、私がどうして「立春」に入ったのかよくわからないんですけれども、何となく中学二年か三年の頃に「立春」の誌友になりました。それから私も投稿してたんです。今年をひかえて甲南大学の研究室を片付けていますと、その時分の雑誌が出てきまして、作品一、二、三、四、五とランクがあります。その作品三というところにあることはあるんです。

それでじゃあなんで中学校の頃のそういうふうなこととして、あと全然ないかと、何となく自分で限界感じたものですか、もう歌の別れじゃないんですけれど、十代のお終いと一緒に短歌作ることあきらめました。

何で和歌の研究するようになったかと、これは多少、私研究会のメンバーの席でもそういう話が出たんですけれども、研究会のメンバー何人か短歌をお作りになっていて、作られる方から言わせると、短歌を作りもしないで和歌の研究はできない、歌の心はわからないとおっしゃいますし、短歌を作れない連中は、いや実作と研究とは別だと、いつまでいっても平行線で結論出ませんけれども、何となく私

は、同じ短い詩の形といっても、俳句苦手なんです。どうも一つは私の受けた教育が悪かったと思いますけれど、俳句というものは必ず季語があつて、その季語が何か理屈に合わないような、例えば、火事と言われるとその季節だと、そんなの火事なんて別に季節関係ないじゃないかなんて言う、あれは駄目なんですよ、それで俳句は駄目と。物語の方にものめり込んだことあったんですけど、何となく体質的になんて偉そうなこと言いましたら、腰折の一つも作れないで駄目なんですけども、消していったら結局和歌が残ったわけなんです。ですから甚だ動機としては、あんまり高尚な動機じゃないんですけど。(笑)

ついでに、じゃあ何で中世和歌をしたかという、これも『源氏物語』をしようと思ったら、玉上さんのような方がいらつしやいますし、上方文学で西鶴とかいうと、頼原先生のような恐ろしい方がいらつしやいます。学生時分先輩が余りなさってないところという、中世の和歌だったんで。それと、何となく『夫木和歌抄』との出会いという、これまた中学校の時に、京大の国史の助手をなさってた奥浦義一先生が、中学校の国史の担当でした。その先生が「郷土史」の編集などをなさってまして、その先生の準備室へ行きますと、国書刊行会本の『夫木和歌抄』が置いてあるんですね。ご存じのように表紙は濃い緑で、背中

は金文字ですから、子供心に随分すごい本だと思いました。それを先生が出してきて、鳴尾や長洲のことなんかはこの歌集に出ているんや、これはなあ、いろいろなことを教えてくれる本やと、そう言われて中学校の時に『夫木和歌抄』というのを触らせてもらってたんです。それを後で、もう少なくなつてたんですけど、大阪の「そごう」、そのころは戦争中でデパートでは売る物がなくなつて、古本屋さんがデパートへ入つてました。その時に『夫木和歌抄』がショールウィンドにちゃんと飾つてあつたんですね。それで何とかあれを買いたいと思つて、父にねだつて買つてもらつた、それが『夫木和歌抄』との出会いです。だから余り高尚な出会いじゃないんですけども、それを引っくり返して見てるうちに、『夫木和歌抄』というのは何だか余り研究されてない、だけど便利なありがたい本というのを子供心に聞かされていきましたから、これは一体どんな本なのだろうと思ひまして、次第に和歌文学の研究など偉そうなことはよう申しませんが、そういう方面に入つて行つたわけです。ですから何となく私、和歌とのつながりというのは、あつたと言えるかと思ひますが、これは全然宮司さんご存じない話なんです。(笑)

玉葉・風雅と折口信夫

司会 それは初めて伺つたんですが、それで先生はまた

『玉葉・風雅集』の研究をなさつていらつしやいますが、ちよつとお伺いしますと、『玉葉・風雅集』を世の中に出されたのは折口信夫先生だったと言われているのですけれども、それは岡野先生その辺のご事情は何か御存知でしょうか。

岡野 これは先生の先輩になられます京都大学を出られた加藤順三さん、つまり折口信夫の二番目のお兄さんの天王寺中学の同級生で加藤順三さんという方がいられて、京都大学の方へ進まれて古典の研究の専門家になられた方です。その方と中学生の頃から、つまり兄さんの友達なものですから折口先生は親しかつたわけです。時々お互いに訪ねて来たりして、古典の話、文学の話なんかしていられたわけでしょう。そして折口先生が國學院へ入つてまだ学生の頃、『国歌大観』というのが出たわけです。それを夏休みに買つて持つて帰つて、大阪の家で夏休みの間蔵の中でずうっと読み通したというんですね。

『国歌大観』なんてわれわれ引くものだと思つてゐるんですけれど、あんなものを一冊全部読んだわけですね。そして夏休みの終り頃蔵の中から青い顔して出て来て、加藤さんがちよつと訪ねて行かれたら、「日本の歌の表現の一番行

き着いたところは、結局『玉葉集』『風雅集』でっせ」と、加藤さんに言ったというんです。

それは後に、『玉葉集』『風雅集』は確かに価値が認められてくるわけですが、まだ、そういう真価が認められるよりも、三十年も早い頃に折口君は『二十一代集』を通読して、そしてそういうことを言ったんだと言って、これは『全集』の月報に加藤さん書いてくださって、われわれ初めて知ったことです。

司会 濱口先生はご研究の間に、折口先生が、『玉葉集』『風雅集』を世に出されたということをお知りになったのですか。

濱口 それは土岐善麿さんの『作者別万葉以後』、あれの解題に折口さんが、「短歌本質成立の時代」というのお書きになりました。私加藤先生のお話は初めて伺いましたんですけど、一応活字になったものでは、土岐さんの本にお書きになったのが最初であり、またそれ以前には『玉葉集』『風雅集』を認めた人は、江戸時代にもありますけれども、正当な評価というものとはちよつと違いますね、言葉の使い方が珍しいとかいうふうなことで。逆に、「集のうちに風体わろきは風雅集、歌のわろきは玉葉集」というふうな、それが一般的でしたが、そんな風潮がある時に、今初めて『国歌大観』を通読なさったことを承りましたが、『玉葉集』

『風雅集』というのを正當に評価なさる萌芽がそこにあったわけですね。

岡野 そうですね、それは後に土岐さんの本の解説に書くような、そんな緻密な形ではもちろんなかったでしょうけれども、勘の鋭い人ですからちゃんと見抜いたんですね。
濱口 いや直観的にそれというふうに言われたのは、やっぱり感性の鋭さ、ですね。

岡野 だと思えますね。その『玉葉集』『風雅集』の一つ前に、やはりそういう良さが少しずつ出てきているのは、『新古今和歌集』だと思えます。けれども、『新古今和歌集』の良さの中では、結局定家流のいわゆる揉揉と歌っていくような歌ではなくて、後鳥羽院風な、後に至尊風という言葉で後鳥羽院の歌風を言いますけれども、ああいう天皇だけが持っていられる臚臚とした、しかも骨格の太い歌と、それからあの頃のいわば今様風の芸謡を巧みに短歌の中に取り込んだ、非常に華麗な歌と、この二つの歌風を折口は高く評価します。

それともう一つは、これも後鳥羽院なんかのお側にいた影響が一つあるだろうと思えますけれども、摂政・太政大臣藤原良経などの非常に透明な、叙景風な歌ですね。ああいう歌の価値を結局『新古今和歌集』の中で発見して、それが本當に繊細に表現として完成せられてくるのが、『玉葉』

『風雅』だというふうに折口は見ていったんだろうと。それは濱口先生からまた伺わせていただければ。

濱口 確におっしゃる通りだと思います。結局『新古今和歌集』というのは『古今』の昔に帰れというところから『新古今』という集の名になりましたし、『万葉』から『古今』『新古今』その流れをはっきり受け止めているのは『玉葉』の為兼であり、伏見院であり、永福門院じゃないかと思うのですけれど。

日本文化の核

司会 今、お話は『玉葉』『風雅』という風に中世の和歌の方へ入っており、今もちょっと後鳥羽院のお話が出たわけですけど、年来日本文化というようなものについて、考えを巡らせてる間に、そもそも日本を日本たらしめているものこそ、日本文化の核、コア(Core)と認められなくてはならないかと、やはりそれはほかならぬ天皇の御存在ではないかというふうに思い至ります。

そこで日本文化の核ともいうべき、天皇あるいは皇室と和歌という問題について、先生方からお話をお伺いしたいと思います。非常に大きな問題ですけど、岡野先生これいかなものでしょうね。

岡野 日本人が感情にしろ、思想にしろ、自分たちの思

いを言葉で表現するときに、昔から表現の二つの形というのがありまして、一つは歌であり、もう一つは物語という、この二つの表現の様式が、日本人の表現の一番核になっていると思うのです。

言ってみれば、結局歌と物語。物語というのは叙事詩と言っているわけですけども、この二つが絡み合って、さまざまな変化を示しながら、百年余り前までの日本文学をずうっと形成してきたんです。それは江戸時代になって随分変わったようですけども、私はまだ江戸時代もその伝統の中に、日本の文学はあると思うのです。これはまた後で、もう少し時代の下ったところへ話が及んだ時に申し上げてもいいと思うのですが。その叙事詩(物語)と歌と、この二つのうちでも核になるのはやっぱり歌であって、記・紀の場合にはもちろん、短歌定型以前の古代歌謡というふうなところから、考えなければなりません。

私は、今でも自分の表現や、あるいは現代の歌人たちの表現を文学作品として評価する時に、いったいわれわれ文学の表現の究極の目的は何だろうと考えますと、結局は力ある表現、力ある歌というところへ考えがいくんです。文学の究極の目的を美とか真とか善とかいうふうなところにおいて考えてみましても、どうもすっきりしない。人間の文学表現の究極の目的は何かというふうに考えていくと、

どうも美とか善とか真とかいうふうなものを立てていくと途中で危なくなってしまう。結局力、つまり自分の中にある衝魄、情熱の根源のようなものを、どう他者に伝えて衝撃を与えるかという、その時の力ある言葉としての伝達が、文学の核になっていくんです。

そういうことを考えると、日本人にとって歌の表現というのは実に大きな問題です。折口信夫の「客人神」、古代の村々へ訪れて来て、新しい年、新しいエネルギーをもたらしてくれる、魂の故郷の遠い海の彼方、天空の彼方からの来訪者としての客人神が、エネルギーを与えていくのは、何によって与えるかという点、結局言葉なんです。ですからそれが歌の核になっていき、それから客人神に対して村人たちが、年の初めに、あるいは事あるごとに祈りをささげ、願い事をする、あるいは感謝を捧げる、その言葉による対話の形のもので、歌の原型になっていく。そして、いつどこで、どういう時にこういう歌による対話がなされたのか、そしてその結果どうなったのかという由来を解く部分が、物語になっていくというふうに考えれば、いいんだらうと思うのです。

この歌と物語の緻密な絡み合いが神話を形成し、それがやがて奈良朝から平安朝に、中国の新しい文学の刺激を受けながら、文学として素晴らしい花を開いていく。そして

その一番骨組みになっていくのが、宮廷の中で育っていくあの「勅撰和歌集」の流れですね。そしてそれが近世のヨーロッパ文学が、全くわれわれの文学とは違った文学概念の範疇の中のものとして滔々として入ってきて、この百二十年ほど、目を洗われるような感じまでそこへ引き寄せられていったんですけれども、その百二十年以前は脈々としてそういう形だった。それだけではなく、近・現代の文学の根底にも、実はそれが本当は生きていると思いますけれど、そのところは、近・現代の文学史の上では片隅に追いやられている問題になるわけです。そんなふうに私は、非常に大づかみですけど考えています。そういう意味で日本文化、日本の文学の根源に、和歌、それから物語を据えたいと思うのです。先生いかがでしょう。

濱口 まさに日本文学という時に、歌と物語、私、韻文と散文の二つの柱ということ、いつもやかましく言っておりますけれど、今おっしゃって下さる通りだと思います。そして近・現代は確かに顕在化はしてませんけれども、日本人の体質的なものとして、それはどこかにいつもあるんじゃないでしょうか。ですから短歌というような形を取ることができない人でも、ものの見方というのはいつでも、そういうところで和歌という言葉を使うと「短歌」の方から叱られるんですけども、(笑)和歌的な発想が常につき

まどっていると思います。

岡野 これは先生が、現代歌人として短歌もお作りになっているから、今歌人たちには和歌と言うと叱られるんだけどおっしゃったんですけど、これは歌人たちに少し視野の狭いところがありまして、われわれの作っているのは現代短歌だと、あるいは戦後こそ短歌なんだ、それ以前は和歌なんだとかいう変なセクト主義があつて。

司会 そうですね、大体短歌というのは明治四十年ぐらいから、「和歌」にかわつて「短歌」の語が普通に用いられるようになりましたね。与謝野鉄幹や正岡子規なんか「和歌」をやめて「短歌」をもっぱら用いるようになって短歌になってきたというようなことを言いますね。

岡野 ところが僕はそんなのは視野狭窄でして、つまりもう『万葉』の分類の中で和歌という言葉ももちろんあるけれども、同時に長歌に対しての短歌という独立した呼び方があるわけですから、大きな短歌史の視野から言えば、別に短歌と言ったからといって新しい、和歌と言ったからと古風だという感じでは、全くないんですよ。

漢詩との出会い

司会 先ほど岡野先生がおっしゃったように平安初期は前代の『万葉集』によって勃興した和歌が著しく衰退して

漢文学が栄えた時期ですね。例えば、中国への遣唐使が廃止されたり、あるいは日本の鎖国のような状態になって、『懷風藻』とか、『凌雲集』とか『文華秀麗集』とか、そういう漢詩なんか非常に盛んになってきた頃から、日本の和歌というのも一時は衰えたかに見える。しかし、それはいわゆる和歌史なんかの上で言うと、公的な晴の和歌であつて、私的な日常的な藝^げの方の和歌というのは逆に非常に水面下で盛んになっている。あるいは中央で衰えてきた和歌が、地方で盛んになったとか沈潜^{しんせん}していた和歌を復興させている。そういったような和歌のいろいろ根強さというものはあるんでしょうね。

岡野 確かに晴の表立った場での第一文学というのは、それは漢詩、漢文になったわけで、それだからこそあれだけ「勅撰漢詩集」が「勅撰和歌集」の出る前に、重んじられたわけでしょうね。けれども、そうは言うものの実際宮廷を中心とした、貴族たちの生活の上の現実、社交生活の上の、広い意味での相聞ですね、狭い意味の恋歌の相聞じゃなくて、広い意味の相聞の面では、やっぱり短歌が第一の役割をしてたんだらうと思います。

それからもう一つ、具体的には漢詩が入ってきますと、「五言絶句」「七言絶句」というのは、文字の数で言うと二十字とか、二十八字ですね。つまり短歌を万葉仮名の一字

一音で表記したとすれば三十一字になりますが、それよりも少ない字数でありながら、しかも「五言絶句」にしても「七言絶句」にしても、漢詩一首で短歌一首の二倍から三倍の表現力を持っているわけですね。それは僕らが最近の一世紀に、ヨーロッパの散文文学や、あるいはヨーロッパの自由律の詩に触れた、その驚きと匹敵するというよりは、その驚きよりも何倍か大きな驚きだったと思うのです。

そういう中で例えば、在原業平という人の歌見ますと、月やあらぬ春や昔の春ならぬ

我が身ひとつはもとの身にして

一首の言葉が終ったあとに、なお言い切ってしまうのがかなり大きな含みを残していますね。業平の歌はいつも、漢詩の影響を受けて、少しでもたくさんの中へおしこめて表してやろうとしています。あの頃は『新撰万葉集』のように歌一首と、漢詩一首を、並べて鑑賞しますからね。やがて『和漢朗詠集』のように半分の対句と比べるようになりますけれども。そうすると同じ一首の定型詩でありながら、どうして短歌はこれだけ漢詩よりも、狭い内容でまとまってしまうんだろう。もう少し大きなことが言えないのかというのが、ああいう業平の歌のよくな苦しみになり、それから「本歌取」の技法なんて、あるいは縁語、掛け言葉というふうなものによって、少しでも歌の

内容を膨らまそうとする努力をするのだと思うのです。漢詩の影響を受けて、少なくとも二・三世紀の間はそういう努力を、非常に無理をしながらつづけて、短歌の表現を広げていったのだと思います。

そのことを考えますと、われわれヨーロッパ文学に触れて百二十年、もうそろそろ、西洋の詩の影響を積極的に取り込んだ上での、新しいあるべき短歌の表現というものが生まれつつあるんだろうと思います。結局私は、日本人は日本語を使っている限り、そういう努力を生まれ代わり死に代わりしていくだろうと思います。

司会 日本は確かにその辺がうまいというのか、例えば、中国の漢詩というようなものが盛んになってきたら、『白氏文集』なんかの漢詩の詩句の中から、うまくそれをまた材料を取り入れて、内容を大きくして、和歌に仕立て上げるんじゃないですか。

岡野 それはもう大変な影響力ですね。濱口先生、中古、中世の歌の上では、それは大変な大きな変化でございまいよう。

濱口 今、漢詩、漢文の話が出ましたけれど、『白氏文集』が出ましたが、結局あれ日本人が『白氏文集』を喜んだのは、白居易が第一に考えた諷諭詩でもなければ閑適詩でもない、感傷詩ばかりですからね。あの感傷詩を人々が諷

じたというのは、やっぱり向こうの方でこういう表現をしている、日本だったらこうだと、常に置き換えのようなものと考えていたんじゃないでしょうか。古筆切の中に『和漢朗詠集』の断簡が多いのも、いかに『和漢朗詠集』を珍重したかを物語っていますね。

書紀竟宴のこと

司会 私は岡野先生のお書きになったものでちよつと読んだことがあるんですが、折口先生は歌会の前に何か古典の講義をされる。つまり、『日本書紀』なんかの「神代巻」の講義をされて、その中に出て来る地名とか神名しんめいですね、それを籤引きでお弟子さんのそれぞれに当てさせて、そしてそれを題にして歌を作らせ、そういう歌会をするというお話を読んだことがあるんですけど、神名といいますと、神戸にいた詩人で、これは岡野先生の先輩に当る方で神宮皇学館出身で、五年前に亡くなりましたけど、足立巻一という人がいます。『やちまた』という小説を書いて話題になった人でですけど、この人が色紙に好んで書くことばは、「日本の詩は神名に始まる」ということばなんです。折口先生の歌会のことから足立さんのそういったようなことを思い出したんですけど、歌に神名を入れて詠むという、それは折口先生どういう意図があったんですか。

岡野 『日本書紀』の講義が一卷終わりますと、『日本書紀』竟宴というのをやりまして、それはもともと『日本書紀』ができて間もなくから、宮中の中で、宮廷を中心とした廷臣たちの間で、あれは政治の手本ですから、研究会が行われるわけです。それで博士なんかの『日本書紀』の講義を聴いて、「神代巻」の一つ講義が終わると、そうすると『日本書紀』竟宴という宴会をしたわけです。その宴会の場で、その聴いた講義の中に出てくる神様の名前、あるいは特別な固有名詞を、それぞれ一人一人が引き当てて、そして即興で歌を詠んだ。

それを戦後折口信夫は、慶應と國學院との学生、あるいはOBのために、ほんの少数でしたけど十人足らずを相手にして何年間か講義して下さったんです。一卷終わると竟宴やるわけです。そして早速その場で竟宴歌を作らせられる。ある時、私は「諏訪の海」という題が当たった。諏訪湖ですね、そんなの十分ぐらいで作らせるわけです。

この湖うみの蒼きに向きて一生ひとよ経む

父さへ波に沈み果てにし

本当は浪に沈んだのは兄の事代主なんですけれども、とつさのことでそんな歌を作りました。敗戦後の一人の若者の気持が天つ神に破れた建御名方神の無念さとかさなりあって、多少とも感じ取っていただければ幸いです。先生は、そ

れをわかつてくれたんでしようか。「今の若い者らしい気持は出ているね」と、まあ、ほめてくれました。その時折口先生は「礮馭^{おのころじま}盧島」ということを引き当てたわけです。そうしたら、

足指も礮馭^{おのころじま}盧島を離れねば

わが思ふことおほよそむなし

という歌を即座に作ったんです。先生さすがだなと何となくその時も思いましたけれど、後になってだんだんこの歌はすごい歌だという気がしてくるんですね。つまり「礮馭^{おのころじま}盧島」とか「天の浮橋」とか、神話の中の言葉でしてね、地球儀の上のどの島というんじゃない。それだけに日本人の心の中に、いつも非常に鮮烈に生き続けている神話の島ですね。その礮馭^{おのころじま}盧島、敗戦の後の心ですからね、あの頃僕よりもちよつと年上の、今前衛派の代表的な歌人ですけど、塚本邦雄という歌人は、

日本脱出したし皇帝ペンギンも

皇帝ペンギン飼育係りも

という有名な歌を作ってるのです。あの頃天皇がマツカーサーと握手なさった写真なんか、われわれに非常に大きなショックを与えた。何かもうこの日本列島から逃れ去って行きたいというような思いを、日本人全体が切実な気持ちで持ってた頃ですね。そういう中で、

足指も礮馭^{おのころじま}盧島を離れねば

わが思ふことおほよそむなし

という形でそういうやるせない思いを歌っている。足指一本われわれの心の中の日本列島から、離れ去ることはできないんじゃないか、その心の虚しさの中で生きるよりしょうがないじゃないか、と言ってるわけですね。これはやっぱりすごい歌だと思うのです。しかも、そういう歌を即興ですらりと作れるというのは、すごいと思うんですね。古典の心がなま身の感情として、生きています。折口信夫は敗戦後、そういうことをわれわれに教えてくれたんです。そういう時の歌の力というのは、あなたのおっしゃった神の名を詠みこむところから始まるんだという、それは非常に大事なことでして、神の名前とか土地の名前というのは、折口はライフ・インデックスと言いますが、これも、「生命の指標」なんです、日本人にとっては。まさしくエネルギーの根源を指標しているものであって、だから恐らく短歌の上で一番大事なものは、今でもそうだと思いますけれども、地名を本当に力ある形で一首の歌の中に定着させて歌えるかどうかということですね。これは俳句でも固有名詞ももちろん大事ですし、殊に地名は大事だと思いますけれども、とくに短歌は、本当に地名を一首の中で生かした形で詠み込めるかということが、大事なんですね。

私の体験で言いますと、何度か韓国から中国を旅行しまして、やはり漢字文化圏の中の地名は、日本の地名と同じじゃないけれども、日本の地名を歌に詠むほどにはなかなか濃密には内容を持たせられないんですけれど、それでも漢字文化圏の土地の名前は、韓国の名前、中国の地名、それぞれ詠み込めるんです。ところが片仮名で表記しなければならぬヨーロッパなどの地名となりますと、非常に難しくなるんです。それは斎藤茂吉がドイツへ足掛け四年間留学して、大変な力^{ちから}わざで西ドイツ初めヨーロッパを二冊の歌集に詠みました。大変な力わざだと思うけれども、でもやっぱり斎藤茂吉でも、日本の地名を、日本の土地の生活の中で詠むのと比べると、非常に稀薄になるわけです。先程濱口先生が早くから短歌の方が自分の心になつていたんだとおっしゃいました。私も俳句と短歌との間は、兄弟のような従兄弟のような関係にありますけれど、結局短歌の抒情の方が遙かに日本人の細胞の中に染み込んでいるようなところがありまして、俳句はそのところが短歌ほどは密着度が切実ではないと思います。

だから割合にアメリカですとかフランスで、もちろんごく少数ですけど、俳句が受け入れられているんですね。中国でも俳句が興味もたれるんです。たった五、七、五というこんな小さな形の小型で、小宇宙を表現するという

のは面白いじゃないかって、非常に興味を持たれるんですが、短歌はそう簡単にいかない。それほど短歌は、日本の心情に密着しているんです。それは特に短歌の下の句の、七、七の部分にあらわれます。

皇室と和歌

司会 最近のことですけれど、私もよく存じ上げてる稲畑汀子さんという、「ホトトギス」を主宰している俳人で、虚子のお孫さんに当たる方ですが、ドイツ語訳を、試みられて大へん好評だったと伺っています。俳句、割合外国人にわかるんですね。その辺が非常に短歌と俳句との違いかもしれませんけれども。

濱口先生、話はちよつとえらい古い方へいつちやったわけですけども、皇室と和歌という問題で、特に中世から天皇さんで非常に熱心に、素晴らしい和歌をお詠みになった方々が出て来られてるんですけれど、その辺のところをお話願えますでしょうか。

濱口 さつき岡野先生から「勅撰和歌集」ということが出ましたけども、和歌の歴史の上では「勅撰集」というのが非常に大きなウエイトを占めています。『万葉集』の一部は勅撰であつたという説が根強いんですけども、「古万葉」とか「古集」とか言われる『万葉集』、あの存在があつたの

で、『古今集』をはじめは『続万葉』と名付けようとした。後では、「いにしへを仰ぎて今を恋ひざらめかも」として『古今和歌集』となりましたが、あの『万葉集』を二十巻にしたのはいったいだれなのか、これは非常に難しい問題ですけれど、あの『万葉集』二十巻、これがちゃんと『古今和歌集』に二十巻という形で、継承されている。部立は『万葉』と『古今』とは確かに違いますけれども、『古今集』における部立が、ずうっとそのまま受け継がれてますね、『金葉集』『千載集』を除きまして、全部二十巻ですし、四季、恋、雑、という三つの大きな分類、あれをああいうふうな形にされたその根源は、『万葉』の四季（雑）・相聞・挽歌でしょうか。『古今集』のことが先程出ましたが。

『古今集』の場合、今まで、色好みの家に埋れ木の半ば人知れぬこととなっていた「大和歌」を、正式なものとして晴の場に取り上げられた、これは非常に大きなことだと思います。四角い文字で書かれたものが、第一級の文学であると思われる時代に、仮名で書く「やまとうた」が、漢詩漢文と肩をならべるわけですから。

そして『新古今』になりますと、先程出ました後鳥羽院のお力が随分大きいですし、「勅撰和歌集」が撰進されるということとは、その天皇の御代がいかに素晴らしいものであったかということ象徴するもので、後世から見て聖代で

あったことのしるしですから、文化の伝統というのを和歌を中心にしてあんまり考えてはいけなかもしれないけれども、脈々として伝統が継承されておりますし、その根本が先程言った「勅撰和歌集」じゃないかと思えます。だから伏見天皇がご自分の御代に「勅撰和歌集」を作ろうと計画されて、皇統の争いの犠牲といつてよいでしょうか、「勅撰和歌集」が初めの時はできませんでした。大変残念がつてらっしゃいまして、『増鏡』にも書かれておりますし、『新後撰集』に撰入された「わが世には集めぬ和歌の浦千鳥むなしき名をやあとに残さん」のお歌も残していらっしやいます。「永仁勅撰」を計画なさった方としては、御自分の治世の時に「勅撰和歌集」ができなかったというのは、辛い思いではなかったかと思えます。

一つはそういうふうな挫折という表現は適当でないかもしれませんが、それがあつたからこそ余計に『玉葉集』において、大きく花開いたんじゃないでしょうか。

岡野 私、濱口先生にお考え一つ聴かせていただきたいと思つてることがありまして、それは例の後鳥羽院が隠岐へ流されてから書かれた評論集、『後鳥羽院御口伝』の中の、定家に対する批評の部分なんですけれども、もちろん定家の歌の力というのは、後鳥羽院は知り過ぎるほど知つていられたに違いない。ですから高く評価していられると

同時に非常にきびしい批判を加えていられるわけです。褒めるところは褒めておきながら、具体的にところで定家の歌の態度を批判していらっしやいますね。例の、「惣じて彼の卿（定家）が歌存知の趣、いささかも事により折によるという事なし。」とあるところですね。定家は歌の価値を考える時に、「いささかもことにより、折りによるということなし」という言葉で批判していられます。歌の価値を考えるのに、その歌のできた背景の事がらや、場合のことをあわせ考えるというのは、恐らくさつき私が申しました、歌と物語の絡み合いというふうに言い換えてもいいと思うのですが、歌の背景にある物語的なゆかりですね、それを歌の価値を考える時に定家はほとんど考えない者だ。歌の評価は独立した一首だけでしか考えない者だという非難ですね。僕はこれは現代短歌の価値を考える時の、現代の歌人たちの考え方とそっくりだと思うのです。

実は歌の伝統というのは、その歌がどういう時に、だれとどういう心の関わりの中で、どういう気持ちで歌われて、そしてその歌はどういう影響を示したのかというふうなことを含めて、日本の歌の評価というものはあったと思うのです。それを後鳥羽院は伝統的に自分の心の中で守っていただけるんだけど、定家は全然それを無視した奴で、揉揉とした歌ばかり作って、自分のいい歌と思う歌以外は、

絶対に認めない奴だと言うっていられて、具体的に例を出して、ある時の花の宴に、定家はやはり近衛の少将として招かれていた、彼の位は全然二十年間も上らないわけですね。それでその思いを、

年を経て御幸みゆきになる花のかげ

古りぬる身をもあはれと思ふ

というふうな述懐の歌として詠んだ。これはもう事柄といい、その場面といい、そして歌の心といい、じつに見事な折りにつけ時につけての歌としての面目を保っている。ところが定家はその歌を全く自賛歌として認めない。それで例の摂政太政大臣良経のことを、その反対の例として引き合いに出されて、良経はそういう折りにつけ時につけての歌の良さというものをちゃんとわかつてる者だと、いうふうに言っていられるわけです。あそこを非常に小さく解釈して、それは後鳥羽院の権力を、定家は家隆のように素直に受け入れなかった。そのことを後鳥羽院が憎んで、しかも隠岐へ流されて、承久の乱に破れて後の不遇な後鳥羽院だから、定家に非常に厳しく当たっておられるんだという解き方をなさる研究者もありますけれども、後鳥羽院のスケールというのはもっと大きいのだと思います。後鳥羽院という方は、白拍子なんかに打ち込まれたり、あらゆる文化をとりこんで、剣まで自分で打とうとせられたりした

方ですから、日本文化の一番根底の魂というのを知っていられた。定家のあの歌の作り方というものは、当時として言ってみれば非常に前衛的だと思うのです。

濱口 でしょうね、達磨歌の。定家自身「新儀非抛達磨歌」として憎まれたと書いていますが、まさに前衛的な新風だったのでしょうかね。

岡野 そうですね、そしていわゆる背景とぶった切っちゃう、物語とのふくよかなつながりをぶった切っちゃって、一首だけで独立させて問おうとする。だけでも後鳥羽院はそれをああいいう形で批判していられるので、そのところが私は非常に大事な問題をはらんでいると思います。日本文化の本質を身に染みて知っている後鳥羽院と、定家という名人芸の歌人との違いじゃないかという感じがするんですけれども、こんな私の考えは当っておりましようか。

濱口 やっぱり後鳥羽院の場合も、天皇のお歌ですね。ですからおっしゃるようには後鳥羽院という方、随分気性も激しいお方の方ですけれども、一方では大変包容力のある、もっとスケールの大きい、定家とは全然格が違う、そういう方のように思います。

定家は定家としての言い分はあるでしょうけれど、『明月記』を読んでいますと、自分の位が上がったりしたことを素直に喜んでいきますし、一方、「貧窮形に現れる」と、もう

こんな格好の悪いことはないというようなことも露わに言うんですから、だから素直な人なんでしょうけれども、一方ではかなり偏屈な。そうなりますと今おっしゃったような、『後鳥羽院御口伝』にありますような批判、後鳥羽院から御覧になれば、確かに定家というのはすごいと、すごいけどもどうもあれはやっぱりあれだけの器量しかないなというふうに、一段と高いところから見てらっしゃるようになっていますけども。

岡野 三月十三日の毎日新聞に論説委員で、岡本健一さんという人が、「稲作儀礼と天皇の歌」という題で書いているコラムなんですけれど、ふと読みましたらなかなか面白いことが書いてありました。昭和天皇がお亡くなりになる前の年、那須の御用邸でお作りになったお歌で、新聞に出まして皆さんよく知っていられるお歌なんですけれど、最後に近いお歌と言ってもいい。今年の二月六日に昭和天皇を偲ぶ歌会がありまして、その時のお歌が一番最後のお歌なんですけれども、その少し前のお歌なんです。

あかげらの叩く音する朝まだき

音絶えて寂しうつりしならん

発表なさる前ご相談があつて、その時拝見した時から、ああこれは調べのいいお歌だと思いましたが。そうしたらそのお歌のことについて岡本さんが、不思議に歌が心に

残る。考えているうちに、『万葉集』の中の舒明天皇の歌だとも言い、雄略天皇の歌だとも伝える、

夕されば小倉の山に鳴く鹿は

今夜は鳴かずい寝にけらしも

あの歌と何か似ているような感じがしてしようがないと言うんですね。調べの上でなるほど何となく似ていると言えは似ている、鹿とそのあかげらとは非常にちがいますが。

同志社大学の辰巳和弘さんという考古学の先生の書かれたもので、『高殿の古代学』という本にはあの舒明天皇の「夕されば」の歌の鹿は、今までの普通の解釈では妻恋の鹿で、鹿に託されたいわば相聞の歌だろうというふうに、解かれているのが普通なんだけれども、そうじゃない。つまり高殿というのは天皇のいわば国見をなさる場所であって、鹿の声にその年の穀物の豊凶の前兆を感じて天子は詠んでいられたんだという説が、書いてあるんだそうです。三重大学の日本古代史・神話学の岡田精司さんの説も引用して、鹿と国見の問題を考えている。そんなことを考え合せて、岡本さんは、ひよっとすると昭和天皇は、アカゲラの声にその年の秋の穀物の実りの前兆をお感じになったのではないかと说着ているんです。

万葉集の本歌取のおつもりで、「夕されば」お詠みになったんじゃないかと、岡本さんは言っているんです。僕は恐

らく昭和天皇にそんなにはつきりとしたお氣持があつて、秋の収穫をアカゲラの声で判じようとか、あるいは「夕されば」の鹿の歌を本歌にして、アカゲラの歌を詠んでみようとお思いになったというようなことだとは思わないんです。

ただ、この御製には格別のしらべと内容は感じます。やっぱり天皇の身に付いてるものなんですね。七年間ほど御用係りとして、昭和天皇のお歌を拝見していてそう思いました。僕たちがこの百二十年の間にヨーロッパの文学にふれて、文学とはああいうふうなものであって、われわれの伝統文学というのは、やはり文学として少しずれてるんだ。あるいは第二芸術なんだというふうな形で考えてきました。それがオーソドックスな考え方だということに今はなってるんですけれど、これはもう少し広い視野で考えていかないと、日本文学の大切なところを歪めることになるんじゃないかという感じがするんですね。

大嘗会の和歌

司会 昭和天皇様というのは、本当にお歌をよくお詠みになったらしいですね。私は北白川女官長から直接お伺いしたんですけど、しょっちゅうお歌をお詠みになってメモに取っておられたというお話を伺いましたけどね。

今稲作のことがちようど出たわけですけど、今年はいわゆる御大典の年ということで、大嘗祭が行われるという意義ある年なんですけれど、これは昨年ですか、『神道大系』の文学篇の中に、「神道唱歌」という一冊が出ましたね。これの内容はいわゆる神道思想を和歌に詠んだ近世の神道唱歌と違って、わが国の神明は和歌を賞美する信仰ということに基づいて、これに歌を奉納して、もって加護を祈念しようとして詠んだという、「法樂和歌」に属するものを集めたものですが、いわゆる平安後期の女流歌人の相模が、「奉納和歌」というのを走湯権現に奉納した百首が最も古いというふうに言われておりますね。

大嘗会の和歌といった、いわゆる一世一度天皇の御即位に際して行われるところの大嘗祭の饗宴、大嘗会のために悠紀、主基両齋国から詠進される和歌というのは、古くから行われてきたようなんですけれど、これについてはいかがなんでしょうね。大嘗会の和歌というのは、大学頭・文章博士をはじめとする儒者が割合に関連をしているというようなことなんですけれど。あの大嘗会の和歌というのはほとんど齋国の地名が詠み込まれているものなんですしょうか。

岡野 つまりその国の歌枕が入るわけですね。大体、悠紀・主基に当てられることの多かったのは、近江とか備中

とかというふうな国が多いんですね。つまりそれらの地方の穀霊を宿した稲を、日本全国の稲の代表のような形で神に差し上げる、それが一番大嘗祭の重要な米の意義になっていく。その時に、マジカルな力をこめている歌でもって、悠紀・主基の国の地名を詠み込んで、それと重ねて差し上げる。これは「東歌」の古い信仰と習俗の名残をとどめているんじゃないかね。

それが今度はどうんと範囲が広がられて、遠い秋田県と大分県ですか、悠紀、主基が定められたというのは、いかにも新しい日本の新しい在り方、平成の大嘗祭の在り方らしいような感じがしますね。ただ、日本文学の伝統の上では、やっぱり畿内の国々に古い歌枕が多いですね。ことに近江というところは、私も近江の地名にとっつかれたようなもので、何遍も何遍も近江をたずねて、歌に詠みました。もちろん大和が一番たくさん行ってますけれど、その次が近江だろう、それと熊野ですね。近江の地名というのは不思議に、何か力があるんですね。それは壬申の乱がありまして、人麻呂や黒人が壬申の乱をあんなふうにと悼んで詠んでいる。そしてその土地そのものに悼みの心を託して詠みますね。

淡海あふみの海夕波うみ千鳥ちどり汝が鳴けば情こころもしのに古いにしへ思おもほゆ
ささなみの志賀からきさきの辛崎からきさき幸さいくあれど大宮おほみや人の船待ふねまちちかねつ

ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめ
もう、これでもかこれでもかというほど、近江の地名と
壬申の乱の悼みを歌うわけです。しかしそれだけじゃない
です、ね、あの鏡の山だとか、額田郷とか、近江の地名とい
うのは何か不思議な力がありまして、それがあるから芭蕉
は、

行春を近江の人とおしみける

という句を詠んだんですね。膳所にいる門弟の尚白が、い
くら芭蕉さまの句でもあの句は言葉の動く句だ、「行く年を
丹波の人とおしみける」と言ったって、ちつとも差支えな
いじゃないかと言うもんだから、芭蕉は怒るわけです。

ああいう芭蕉の心意気というのは、非常に僕はよくわか
る気がするんです。芭蕉という人の俳句は、非常に短歌的
なところが日本人好みなんですね。蕪村の方が派手で楽し
いんだけど、やっぱり芭蕉の短歌的な叙情が好まれる。
それだけに俳句の方では、正岡子規なんか蕪村の方をむし
ろ高く買っているのは、俳人の評価としてはよくわかると思
うのです。そういう土地にからむ長い思いが、結局大嘗祭
のああいう、悠紀の歌、主基の歌というふうなものにも、
ずっつと集約せられてきているんだろうと思いますけれど
もね。

司会 大嘗会の「風俗歌」、「屏風歌」とも、悠紀、主基

両国の名所地名に寄せて詠まれるんですけど、当然いわ
ゆる賀の歌ですね。賀がそこにこめられているわけで、「屏
風」の場合にはそこに一年の十二ヶ月の行事とか、あるい
は風物といったものが組み入れられて詠まれるという、特
殊な条件の下に作られておるわけですけれど。従ってこれ
はいわゆる儀式の場における儀礼の歌だと思うのですけれ
ど、有名な歌人がいろいろ作者に選ばれて詠まれています
ね。それと共に濱口先生、これからは「勅撰集」の賀の部
なんかにも、かなり取り入れられているんじゃないでしょ
うか。

濱口 そうです。今「勅撰集」の賀の部が出ましたけど、
「勅撰集」の部立は集によってそれぞれの特徴がありますけ
れど、どの「勅撰集」を取っても、賀の部は必ずあるわけ
です。それが「勅撰集」の特色で、「勅撰集」だから当然賀
の部は欠かしてはならないんだと思いますけど。

今の悠紀、主基の場合、これは賀の部の一番おしまいの
ところに並ぶのが多いのですが、で、また同じ人が何度か
選ばれてますけれども、この歌を詠むのは難しいでしょう
ね、賀というので一つ大きな枠をはめられて、しかも悠紀、
あるいは主基、必ず詠まねばならない。今先生のおっしゃ
った穀霊の、それが入ってないと駄目ですから、単にいい
歌ですねといわれる、それじゃ駄目ですから、祈りをこめ

るという制約があり、しかも、あとになると屏風の絵を伴いますから詠み人も自ずから制限されてきたのではないかと思えますけれど。

悠紀、主基の歌だけの研究というのは案外少ないんですね。何年に何があつてということは記録の上から割にわかるのですが、以前にはかのことで調べかけたことがあるんですけれど、案外わからないんです。「勅撰集」に入ってる歌を集めたのはありますが。その入集歌以外にもつとあつたと思いますが、先生そういうのございますか。悠紀、主基のそれぞれの時、入集歌だけが奉られたんではなからうと思うのですけれど。

岡野 「屏風絵」が描かれまして、その図柄をまた歌に読みこむわけでしょう。ですから歌作る制約の上から言えば、二重三重の制約があつて、非常に詠みにくい限定をさせられるんだらうと思えますけれども。

歌会始のこと

司会 『大嘗会和歌の世界』という書物を書いて、今、八木意知男という人が、こればかり研究していますが、この問題は八木さんの著書を参考にすることにして。そこでどうなんでしょうね、岡野先生は御歌会始にもずっと出ていらっしゃるんですけれど、われわれはまだ出たことな

いんで、御歌会始の様子といったようなものについてお話いただけますか。

岡野 最近では御歌会始がほとんど完全にテレビで放映せられるようになりましたから、ご覧になればよくわかると思うのですが、まだいくらかご存じない方がいるのは、歌会始というのは、宮中で月々、^{つきごころ}月次の歌会、——月次という言葉は後には月次調などと軽蔑的な意味になるんだけれども、本来月次ということは月次祭など、毎月毎月の意でいい言葉なんです——その月次の歌会があるわけです。その最初だから歌会始ということです。今も一月から十二月までと、皇太后、天皇、皇后のそれぞれの御誕生月の歌、それに明治天皇にちなんだ文化の日の歌会がありますから一年に十六回になりますか、歌会があります。皇族方や、侍従職をはじめとする歌を詠まれる人がみな詠むわけですよ。

そしてその年の初めての歌会だから歌会始なんです。その時だけは明治になってから広く国民から詠進を募られるようになったわけです。昭和二十年までは宮中に御歌所というのがありまして、そこでそういうことをやってたわけです。そして天皇のお歌や、皇族方のお歌のご相談役も、そういう御歌所派と言われる、いわゆる旧派の人々がつとめていた。ところが昭和二十一年から、佐々木信綱、それ

から斎藤茂吉、窪田空穂の三人が民間から選者に入りまして、題もそれまでは「松上の鶴」とか、「社頭の曙」とかいふ漢詩風の題だったんです。非常に詠みにくかったと思うのです。当然、ああいふ題で詠めば、旧派的な表現しかできなくなりますね。それを二十一年から「曙」という題に変わりまして、その年にロサンゼルス二世の高柳さんという人が、

曙の大地しつかと踏みしめて

我は呼ばんとす祖国よ立てと

という歌を寄せてこられたんです。斎藤茂吉はその頃まだ敗戦直後で自由に旅行もできなくて、しかも健康を害して山形県の疎開先で療養してた頃なんです。私は選者として第一次選、二次選はいたしましたけれど、最後の選の会議には出られません。だから選定はほかの選者の方にお任せします。ただこの一首だけは斎藤茂吉が命にかけて取った一首ですから、落とさないでいただきたいという手紙をよこしたということです。この話は入江相政さんからうかがいました。いかにも茂吉らしいし、戦後の氣持が出ていていい話ですね。

そういう頃から現代短歌の歌風が変わったんですね、それで非常にみんな詠進しやすくなったわけです。大体三万首が毎年詠進せられてくるわけですけど、九月の初めか

ら十二月半ば頃までかかって、その三万首を選ぶわけですね。

司会 外地に住んでおられる人なんかも、かなりきてますね。

岡野 外地からもきてます、それで毎年大体一人くらい外地の方も選歌に入りますね。そういう歌会始を中心とした歌の伝統が宮廷にあるわけです。昭和天皇があんなふう健康をだんだん悪くしていかれると国民が宮城前へ記帳に集まったり、雨に濡れた砂に座ってご健康の回復を祈ったりする姿がありますね。そういうのを見て、割合にそういう雰囲気を持つてるイギリス人でも、イギリスの王室と国民との間にはこういう心の通いあいはない。日本人は不思議な人種だといふうな言い方をするわけです。

そういう時私は一つ、外国人も日本人も考え落としているものがあると思うのです。それは昭和天皇なんか明治天皇ほどではないけれど、かなりの数の歌をお作りになっています。発表せられたのはほんのわずかでですけど、それでも正月の頃大体七首新聞に発表になる。新聞によって三首に削ってしまったり、四首に削ってしまったりするんです。陛下はそういうところ正直な方なもんだから、「入江、七首発表したではないか、なぜ三首しか出ていないんだ」とこうおっしゃるんだそうですよ。それでこの頃少し減らす

ようになったんですけどね、そういうふうに正月に七首ぐらい発表なさる。それから歌会始の御製は当然あんなふうにして広く行き渡る。

それから植樹祭と国民体育祭に地方へ行かれたら、必ずその県で二、三首の歌を、その県の地名を詠んだ歌を発表なさるんです。それはその地方の新聞に必ず出るんです。そういうものを通じて、あの圧縮せられた伝統的な短歌の表現で、一年でとにかく十首超えるくらいのお歌に国民は触れているわけです。お歌を通して天皇の文学的な、文化的な、凝縮せられたお心を知る。そして自分たちのところへ来られて、自分たちのところの地名を詠んでくださった歌に触れてるわけです。

丸谷才一さんという小説家が『日本文学史はやわかり』という本を書いた。それを一口で言えば、日本文学史というものとは「勅撰集」を通して見ると、日本文学史というものが自ずからすーっとわかってくるんだということがあの本の趣旨です。これは実に名論です。その丸谷才一氏が山形県の生まれなんですね。そうすると大正十五年の歌会始にまだ皇太子だった昭和天皇がお詠みになったのが、

広き野を流れ行けども最上川

海に入るまで濁らざりけり

という、非常に柄の大きな調べのゆったりした歌なんです

ね。それを山形県では作曲して、小学生や中学生が歌ったというんです。それは子供心に非常に日本の伝統的な詩の美しさとして残っているというんです。彼は斎藤茂吉の、
最上川さかしら波の立つまでに

吹雪く夕べとなりけるかも

これも名歌だろう、名歌であるということは認める、しかし、あの昭和天皇のまだ皇太子の時の歌の方が悠々としてるじゃないか、と言うんです。

古典としての『百人一首』

司会 いいお話ですね。だいぶ時間が経ってしまいましたが、濱口先生には、『日本のかるた』という著書がありですけど、私はどうも日本のかるた『百人一首』というものが、割合和歌と日本文化を伝承するのに大きな作用をなしたんじゃないかと、こう思うのですけどもいかがでしょうか。私らでも子供の頃に正月がくると、非常に楽しみのひとつで『百人一首』でよくかるた取りをしました。一枚札なかであれば「むすめふさほせ」ですか、自分の得意の、天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ村雨の露もまだひぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕暮あしびきの山鳥の尾のしだり尾の

長々し夜をひとりかも寝む

といったような、そういうのを取られまいとしていろいろ頑張ったわけですけど。かなり濃厚な恋の歌でも、その本当の意味はよくわからないけれども、やはりこの「五、七、五、七、七」の快いリズムといえますか、そういう美しい言葉を子供心にも魅力的に感じたわけです。やはりこの種類の「かるた」なんていうのは、外国に無い日本独自のものなんじゃないでしょうか。

濱口 ああいう形はあるいは外国に無いのかもしれませんが。もつとも、向こうではトランプとかそのあたりのが多いですから。ただ私いつも言うのは、古典というのは人々の生活に染み込んでいなくてはならないと。神棚に祭り上げておく、あがめまつるのが古典じゃないと言っておりませんが、『百人一首』こそ本当の古典ではないかと思えます。

今の学生は割に『百人一首』の歌というのは覚えてないんですが、それでも聞きますと中学校の頃に暗誦していますね。それより前の時代でしたら、本当に、無学なと言うと大変失礼ですが、目に一丁字なき人々でも知らず知らずのうちに『百人一首』の幾つか、またそのものじりみたいなものは、ちゃんと何か言葉の端々に出てきますね。そういう意味で私は、一番国民の間で生きてると言うんですが、それから、これは私の時代で終わったと思いますけれど、今「かるた」を取ると言うと、味もそっけない活字体の

取り札ですが、私の小さい時はまだ筆写体のそれを、そうすると「人」という字だけ一番大きく書いてありますから、よくお手付きをして、さながら「歌がるた人」という字に手が五つ」という川柳そのままでした。何となく小さい間から『百人一首』というところであいうふうな、それは印刷した物ですけど、筆写体の物で取っております。そんなことで自然小さい間から『百人一首』の歌というのを覚えてますし、それから字というのもやっぱり覚えていったのではないのでしょうか。

明治・大正・昭和

司会 俗な話になりますけれど、宝塚のスターの芸名なども、むかしは「天津乙女」とか、「霧立のぼる」とか、「百人一首」の和歌の言葉からとられておったんですけれど、今はそんな優雅な名前も変っていくのでしょうか。

将来の短歌はどのようになって行くのでしょうか。問題は非常にむづかしく大きすぎるかも知れませんが、短く言って、岡野先生これからの和歌というのはどういうふうになっていくんでしょうね。

岡野 その前にちよつと『百人一首』がせっかく出ましたから、『百人一首』のつまり百首の歌の最初に置かれる歌というのは、例の天智天皇の、

秋の田のかりほの庵とまの苫とまをあらみ

わが衣手は露にぬれつつ

あれとよく似たような歌は『万葉集』にあるけれども、どこから出てきたのか、本当に天智天皇の御製なのかということはわからないですが、しかしあの歌を天智天皇の御製として『百人一首』の最初の一番の歌に据えたということは、やっぱり非常に象徴的だと思うのです。そして「秋のかりほ」というのは、稲の耕作の一番中心の場であって、それが天智天皇がまるでかり庵にきて、自ら露に濡れているような感じがあの歌に出ていて、それを天智天皇の御製として『百人一首』の一番トップに据えているということ。ああいうところから宮廷文化と、それから地方の文化とが交流し合ってゆく。その媒体にいつでも短歌というものがあると思うのです。

これも世間ではほとんど知られていないことなんですけれども、現代でも天皇の歌を心に持って歌を作っているというふうなことを、しばしば名も無き人たちはやっているわけですね。その著しい例で、昭和三年のことなんですけれど、折口信夫の歌集の中に「王道」という題の一首の歌があります。明治天皇の、

年々に思ひやれども山水やまみづを汲みて遊ばん夏なかりけり

という、これは日露戦争の最中にお詠みになったお歌なんです。それを小さく引きまして、そして、

大君は遊ばずありき彷彿おもひかたに夏山川を見つつなげけり
という歌を一首、「王道」という題を出しているんです。僕は、ああ折口は明治二十年の生まれだから、明治天皇に深い敬愛の心を持って、明治天皇ですらまつりごとに非常に心を勞していられて、夏の涼しい山川を心に持ちながら、実際にそこで避暑をなさるなんていうことはなかったんだという、その思いでこんなふうには、しかもそれが天子の道なんだというふうに言ってるんだなと思ってたんです。

これはほんの最近までそうとしか僕は思い至らなくて、そんな注釈も付けてたんです。ところが昭和天皇がお亡くなりになって、ふっと気がついた。昭和二年は喪の年ですから歌会ないわけです。三年の「歌会始」の題が、「山色新なり」という題なんです。そして、

山々の色は新たに見ゆれどもわが政まつりごといかにあるらん
という歌を歌会始に出していられる。恐らくそれを見て折口は、この若き天子にお応えしなければと思って、昭和三年に「王道」の歌を作って夏発表してるんです。

つまり日本の歌の一番生きた場面というのはそういうやり取り、雄略天皇と赤猪子のやり取りのような、ああいう気持がずうっと僕は生きてきたことにあると思うのです。

歌によつてやる時に、一番素直に、心の誠、あるいは感情の「あはれ」というふうなものが、すーつと通じ合つた。

そういう広い意味の相聞というのが、日本の和歌の伝統の一番大事なことだつたと思う。しかもそれは今でも生きてる。いわゆる知識人の中には、こんなものは第二芸術だと思つてゐる人もあるかもしれないけれども、村々の人たちの心の中には、生きてるところがあると思うのです。これはもう少し僕たち考えてみる必要がある。

そんなことを考えながら、三代の天皇の御集をこの頃拝見してゐて、大正天皇の御製が非常に詩人的な感覚では冴えてゐるんです。恐らく僕は近代三代の天皇の中で、大正天皇が一番詩人的な才能としては、豊かな方ではないかと思ふのです。昭和天皇や明治天皇歌は皆さん大体知つてゐられるから、大正天皇の、例えば、

いづくより渡りにけんものすき荒磯崎に立てる大鷲
尾白鷺か何かご覧になつたんですね。あるいは、

這ひし跡さやかに見せて蝸牛かたむし

いづこにいまはかげをひそむる

蝸牛の這つた跡、銀色に光つてゐるあれを詠んでゐられる。

村雀ねぐら争ふ竹むらの奥まで赤く夕日さすなり

『玉葉集』の歌風そっくりですね。こういう歌を詠まれた大正天皇の時代が大正十五年間、明治と昭和の間にあるとい

うこと。日本の都会人たちの文化が爛熟し過ぎて乱れた時代のように言われるけれども、僕は平成に至るまでの近・現代三代の中で、大正十五年間というものが、大きな意味を持つだろうと思うのです。

そういう問題を考える時に明治天皇の御製とか、大正天皇、昭和天皇の御製というものが、その時代の文化の一つのめどとして考えられなければならない。そういう視点を持った文学史が、一世紀後には、本当の文学史を書く人によつて書かれるだろうと思う。今は、何かそういうものは我々の文学と別物だみたいと考えてゐるけれども、僕はそうじゃないと思うのです。そういうのが本当の透徹した文学史の史観であるだろうというふうに思うのです。

それと今、中学生、高校生たちの間に、俵万智ブームなんていうものじゃなくて、もつと広い地盤で短歌定型を口語で満たすという情熱が割合に盛りがつてきているんです。いい歌の何首か僕今でもそらで覚えてゐます。なぜこういうふうになつたかと言いますと、一番大きな原因は、昭和二十一年、二年頃、『第二芸術論』というのが、桑原武夫さんや臼井吉見さん、あるいは小野十三郎さんなんかによつて提出された。非常に厳しい伝統定型詩批判論です。僕なんか半分それに共鳴し、同時に心の半分では、こんな単純な合理論や、こんな感傷的な理論で短歌を葬り去ろう

とするのは、ひどいじゃないかという思いが、かえって短歌への執着になっていったんです。しかし僕たちの年代の殊に知識階級がそれに非常に影響せられたわけです。中でも高校や中学校の国語の先生が臼井吉見や桑原武夫の論に強く共感した。あの第二次世界大戦の戦没学徒兵の手記のように、自分の生きる第一義を論理濃やかに追求すべきであるのに、こんなもの悲しい叙情によって、自分たちの最後の思いを表現した、いかにも悲しいではないか、こんな日本的な叙情を再び次の世代に与えまいというふうな言い方は、非常に僕たちの心にも響きました。

でも僕は幸いに、もう少し深く古典をその時にすでに読んでましたから、そう単純には第二芸術論に全面的に傾きませんでした。だが、国語教科書に短歌単元があっても、飛ばして教えない先生が多かったです。それは僕よく国語の先生の研究会なんか呼ばれて行くと、必ず一人ぐらいそういう先生がいて、「もう短歌などの日本的叙情を若者たちに与えません。」とおっしゃる。それは先生独断に過ぎるでしょう。与えられて彼等の選択に任されたらどうですか、その時に先生の意見をおっしゃるのはいいけれど、全く与えないというのはひどいでしょう、飛ばしちゃうというのはひどいでしょうと私は言うけれど、そういう先生は必ずいましたよ。

だけどそういう先生が停年になられ、世相もまた短歌に抵抗感がなくなっただけですね。僕は若い人は文語でかならずしも短歌定型を満たさなくなっていると思う。もう言文一致体が発明せられてから百年たっているわけですから、短歌定型が口語をも併合しはじめたと僕は思っているわけです。少し楽天的すぎるかもしれないけど、日本人が日本語を使う限り、短歌定型は減びないと思いますね。

司会 只今は岡野先生が現代短歌の新しい動きまでお話いただいて、古代から現代短歌に至るまで、非常に短時間の間でですけど、大変重要な「日本文化と和歌」についてのお話が軌道に乗って出てきたわけですけど。要するに長い歴史は、治乱興亡の狭間を、日本文化の一つの核として生きてきた和歌というのは、やはりしたたかな文学であって、衰亡が叫ばれると盛り返したというような、こういう歴史事実の証明から、これからのハイテク時代にあっても、三十一文字の中に叙情を押し込めて、詠み続けられて行く時代になつて、この短詩型の短い文学がえって好まれ、三十一文字の中に凝縮した心をこめて詠まれる歌というようなものが、かえって盛んになって行くのじゃないかというようなことも思うわけでございます。今日は岡野、濱口両先生、どうもありがとうございました。